

変えてはいけない価値観

(原文)

染谷 真由 (14 歳)

茨城県

常総学院中学校

5 月の連休中に祖母と散歩をした。田んぼには、水がはられていて、その水が 5 月の空や新緑を映して揺られていた。風が気持ちよかった。小学校の前を通った時、私は、小学校の前に大きな石碑があったことを思い出した。6 年間、毎日、当たり前のように通っていた場所なのに、意識したのは初めてだった。私は、祖母に何の石碑なのか聞いてみた。祖母は、少しだけ顔を曇らせながら、この場所は戦争で亡くなった人の魂をお祀りしてある碑が建てられているのだと話してくれた。祖母に誘われて、石碑の近くまで行ってみた。3 メートル近くもの高さがある立派な石碑が立っていた。石碑には「忠魂碑」と書いてあった。もう建立されてから随分と経っているようで、石の表面には薄緑色の苔が生えていた。

「すごく大きいんだね」と私が思わず言うと、少し間があった後、祖母が「こうでもしなくちゃ、戦争で子どもが亡くなった親の気持ちは収まらなかったんだよ。今だって、亡くなった人への悲しみや辛さはまだ消えてないんだ。この地域の人達も戦争で大勢亡くなったんだよ」と言った。隣にももう一つ石碑があって、戦争で亡くなった大勢の人たちの名前が書いてあった。この名前の数だけ人生があったのだ。私は、歴史の授業で戦争について学んだ時、広島や長崎の原爆や東京の空襲で大勢の人が亡くなったことを知った。でも、自分の身近にも戦争の傷跡が残っていたことに驚いた。祖母は、戦争が終わってからも、皆の生活はなかなか戻らなかったということを教えてくれた。戦争が終わってから何年もの間、家も家族もすべてを失った人たちが路上で暮らしていて、毎日のようにおにぎりをもらいに来たそうだ。

「もっと生きたかったらうねえ。もっとやりたいことがあったらうねえ。」

祖母は忠魂碑をそと手でなでた。私も手で触ってみた。少しざらざらしていたけれど温かった。そして、私たちは何も言わずに碑に手を合わせた。

私は、家に帰ってから、インターネットで「忠魂碑」を調べてみた。ネット上に、驚くほどたくさんの「忠魂碑」が示されて、先のとがった印でマップが埋め尽くされた。それを見たときに思わず目を背けてしまった。こんなにたくさんあるの？ うそ……。私の小学校があった常総市には、18 か所、つくば市は 50 か所近くあった。日本には、こんなにもたくさんの戦争の傷跡があったのだ。そしてその傷跡は無言で、でも姿を消すことなく残っているのだ。戦争があったのは、遠い昔ではなかったとい

うことだ。そして平和は絶対的なものではない。

テレビでは、連日、ウクライナのニュースが流れている。無抵抗な市民が手足を縛られて殺されていたという報道もあった。私は怖いと思った。ウクライナの人達は何も悪くないのに、今日だって私たちと何の変りもない幸せな生活を送っていたはずだったのに。戦争がそれを奪った。私は信じられないような残酷なニュースの報道に胸がしめつけられる。学校で SDGs を学んでも、何もすることができない自分の無力さをかみしめる。一刻一刻、大切な命が奪われていっているのに……。祖母は、ウクライナで起こっていることと自分が体験したことが重なって見えると言っていた。

明治時代、お米一俵は 2 円で買えたという。家は 1 千円あれば建った。今、1 万円あっても家は建たない。お金の価値が変わったのだ。お金や物の価値観は変わっていく。でも、変わってはいけない価値観がある。人の命、平和の大切さは最も大切にされるべき価値観だ。しかし、命よりも国の利益が上になってしまうことは実際に、起こりうるのだ。私たちは大事な価値観を全力で守らなければならないと強く思う。